

万葉集の磐姫皇后歌とその歌群の構成

榎 本 福 寿

- 一、「山たづね」に関する先行説
- 二、「迎ふ」の語性
- 三、「い帰り来むぞ」と「迎へを行かむ」との対応
- 四、「たづぬ」の語性
- 五、「山」と「山たづね」
- 六、「山たづね」と「迎へか行かむ」との相関
- 七、「ずは」と反実仮想
- 八、「恋ひつつあらずは」と死の仮想
- 九、「かくばかり」をめぐる表現
- 十、「かくばかり」による八五、八六歌の相関
- 十一、「ありつつも」をめぐる表現
- 十二、「ありつつも」による八五、八七歌の相関
- 十三、磐姫皇后歌群の特質

仁徳天皇の皇后であった磐姫については、古事記や日本書紀が、天皇の好色となりあわさる嫉妬にまつわる伝承を伝える。記紀の伝承のなかでも、それはとりわけ異彩を放っている。

万葉集は、この磐姫皇后の歌を相聞歌の劈頭を飾る位置に据える。四首の連作から成る、この題詞に「思_二天皇_一」という歌の内容および歌群の構成を、歌の表現に焦点を当てながら分析を進める。

一、「山たづね」に関する先行説

君が行き日長くなりぬ山たづね迎へか行かむ待ちにか
待たむ（1・八五）

「磐姫皇后思_三天皇御作歌」と題する四首連作の冒頭に位置すると同時に、万葉集全体の中でも相聞の劈頭を飾る余りに名高い歌が、右にまず採りあげた一首である。ほとんどあらゆる点にわたってすでに論じつくされているといっても決して過言ではなく、傍線部「山たづね」に關しても、さまざまな説がある。ただ、管見に入った限りだし、もとより一律には論じきれないとはいえ、それら先行説には、とりどりに問題を認めざるを得ない。しかもその問題に、いわば偏りがある。

すなわち、「山たづね」それじたいの分析なり考察なりに取り組む方向をほとんどとらない。当該歌の左注所掲の古事記の一節がつたえる衣通王の歌「君が行き日長くなりぬ山たづの迎へを行かむ待つには待たじ」の、傍線を付した「山たづの」との関連は否むべくもないが、衣通王が輕太子のあとを「追ひ往き」て「共に自ら死にたまひき」という古事記所伝のこの行動を背景にもつことによつて、「山尋ね」に「死」のイメージすら同時にこめられているとみなすのが青木生子氏「相聞の歌と『死』——磐姫皇后の

八六番歌をめぐつて」（『青木生子著作集第四卷 万葉挽歌論』一九九八年。おうふう）である。青木説は、八六歌の「岩根しまきて」も岩根を枕に横たわる死の様相と見た上で、結末を「共に自ら死にたまひき」とむすぶ古事記の輕太子物語のイメージが重なり合っていると指摘する。この青木説を、廣川晶輝氏「書記テキストとしての磐姫皇后歌群」（梶川信行編『初期万葉論』平成十九年五月。笠間書院）は批判する。古事記の当該一節を左注に引用する際、歌謡の一字一音表記を訓字主体に書き改めるといった、「他の異質テキスト」の「均質化」が施されていたとし、「他のテキストが並置されている当該テキストには、〈對比〉という要素が見出される、と考えるべきではないであろうか。」（112頁）、そして当該歌について「この〈對比〉の機能により、磐姫皇后の思慮し逡巡する〈像〉が一層強調されることとなるのである。」と結論づける。

青木・廣川両氏の説ともに、主張に違いはあつても、古事記の所伝との関連にそくして当該歌を読み解くことに力点を置く。いきおい、「山たづね」の方が背景に後退しかねない。これとは対照的に、阿部誠文氏「磐姫皇后、天皇を思ひたてまつる御歌四首——亡夫追慕の歌として——」（『九州女子大学紀要（人文・社会科学編）』第四十三卷一号。平成十八年九月）は左注とは切り離し、「山たづね」も枕

詞「山たづね」とは全く別の言葉とみなす。ただその「やまたづね」の解釈は、いささか短絡的ではないか。「山たづね」は「君」が行ったところは山であり、迎えに行くのも山であることを示している。すなわち、『君』は、山中にいたことになる。」とみなし、柿本人麻呂の「泣血哀慟歌」や「臨死自傷歌」をもとに「山たづね」を「火葬になって山に葬られた死者を尋ねる意と理解される。」(94頁)と説く。人麻呂の、たとえばその「衾道を引手の山に妹を置きて山路を行けば生けりともなし」(2・二二二)について「亡くなった妻は、山にいて、あちこちの山を探し求める、つまり尋ねている歌になっている。」と解釈して導いた説だが、その解釈したいなら根拠がない。

「山たづね」を、山に死者を尋ねて入ることとみるこうした見方には、根強い支持がある。当該歌の次に位置する八六歌の「高山の磐根しまきて」と深くかわるものとして、和田嘉寿男氏「高山の磐根しまきて―山中他界を考える―」(『武庫川国文』五七号。平成十三年三月)は、この八六歌をもとに八五歌が成り立つと主張する。

すなわち、これほど恋の辛苦をなめるよりは、いつそのこと死んでしまいたいというのが歌(八六歌―榎本補記)の趣旨だが、恋の破局の死出の旅は、やはり山でなければならぬ。それなら、辛苦のあまり山で死

ぬという構図が先にあつて、そこから逆に君を求めて山に入るという一首目の構成が組まれたとも考えられる。(1頁)

このあと、「死出の旅はなぜ山でなければならないのか」といった問題設定のもとに、「山中他界」をめぐる論が展開する。その当否はともかく、山中他界説も含め、「魂ごひ」や「山尋ね方式」では八五歌を解し得ないことは、つとに稲岡耕二氏「磐姫皇后歌群の新しさ」(『人文科学科紀要』第60輯。東京大学教養学部人文科学科国文学研究室・漢文学研究室編。一九七五年)が縷縷説き、また寺川真知夫氏「磐姫皇后の相聞歌」(セミナー『万葉の歌人と作品』第一巻「初期万葉の歌人たち」。一九九九年五月。和泉書院)も稲岡説を踏まえ、当該「山たづね」にそくして、これを「やまたづね」の方式、「すなわち招魂の儀礼の表現とみて挽歌的発想の歌とする折口信夫の解釈」、「折口説はもはや歌群中の歌の理解としては成立しがたいとの評価は定まったといえる。」(180頁)と断じてさえている。

二、「迎ふ」の語性

稲岡氏がわざわざ「万葉集の分類ではこの歌群は相聞に入られてある。編者の意識では決して挽歌に編入せられないようなものではなかったのである。」(25頁)と念を押す

ところに、実は当該歌をめぐる問題の根深さが予見されていたことになる。稲岡氏は、当該歌を明快に「長旅の夫の帰りを待つ女の歌である。」(26頁)とみる。「山たづね」についても、「帰りの遅い夫を山の中に尋ね求めるという文字通り『迎へ』に行く状態の説明として受け取られる。」(同上)と説くが、これ以上掘り下げてはいない。寺川氏の説では、せっかく折口説を否定しながら、前掲阿部氏の所説と同じように、柿本人麻呂の「石見国で死に臨んだ時の自傷歌」にそくして、それが「旅先での死を妻は知らずに待つと歌い、行き倒れのイメージの表現を持つ。したがって歌群中の歌としての八五歌との関係では行路死のイメージを外しえない。」と稲岡説から後退した印象さえ拭えない論が展開する。

もっとも、寺川氏の説はそれだけに終わるわけではなく、また他にみるべき論考も少なくない。ただ、この稿の冒頭に不平をかこったように「山たづね」の内実にとこまでも迫る分析をめざしたものが目に入ってこない。稲岡説の前掲一節の「山たづね」の説明のかぎりでは、とうてい肉迫とはいえない。だい一、「尋ね求めるという、文字通り『迎へ』に行く状態」という表現じたい問題である。尋ね求めることと、迎へに行くことは明確に異なる。この違いに、従来ほとんど関心を寄せない。

一般的にも、「迎かふ」にあたる口語「迎える」について、たとえば「こちらに向かつてくるものに對して、途中まで出かけて待ち受ける。また、用意して待つ。」(小学館『国語大辞典』昭和五十六年十二月)という説明にある、この行為の対象となるものの「向つて来る」行為なり、意向なりの発動を前提とする。この発動が無ければ、単に行く、出かけるなどではない。遡って万葉集の用例もまた、この「迎える」の語の基本どおりのあらわれをみせる。

(1) 冬こもり春去り行かば 飛ぶ鳥の早く御来ま
さね 龍田道の岳辺の路に 丹つじの薫はむ時
の 桜花開かなむ時に 山たづの迎へ参出む 公
が来まさば(6・九七一)

(2) 安治麻野に宿れる君が婦り来む時の迎へをいつ
とか待たむ(15・三七七〇)

(3) 浜辺より我がうち行かば海辺より迎へも来ぬか
海人の釣り船(18・四〇四四)

三例ともに、「迎へ」は傍線部の「来」または「行」とま
さに対応する。このほか、「来」を明示しない例もあるに
はあるが、

(4) 去年の春相へりし君に恋ひにてし桜の花は迎へ
けらしも(8・一四三〇)

この例は桜花を擬人化し、去年逢った君に恋してしまつた

その桜花が、今年もまた美しく咲いて君を歓迎しているとうたう。桜花を見に君が来たという言外の意は、下二句に明らかである。さらに七夕にちなむ例がある。

(5) 牽牛^{ひくま}し嬌^{めづ}迎へ船こぎ出らし天漢^{てんかん}原に霧の立てる
は(8・一五二七)

傍線部の原文は「迎嬌船」に作る。山上憶良の三首連作の最初の歌であり、伊藤博『万葉集釋注四』は「この三首は、織女が牽牛に逢いに行くという中国の七夕伝説の型に則りながら、それを変曲して詠んだ歌らしい。」(589頁)、さらに後二首についてそれぞれ「迎えの船を今か今かと待ちあぐんでゐる織女の心である。」(一五二八)、「第一首の一五二七でうたわれた舟出を受け、それに胸をはずませる織女の心を詠んでいる。」(一五二九)と読み解いた上で、この三首の独自を「妻どいの型にのみ満足しえず、かような構図を創り出したところは、いかにも憶良らしい。」(591頁)と説明を加えている。七夕歌に通例の妻どいのかたちをとらないという点では、むしろ「迎嬌」こそその著しい例とすべきであろう。この「迎」は、二首目の「君待つと」や三首目の「吾が待つ君し」に対応するという以上に、それらを前提とした表現だったはずである。

くだんの磐姫皇后の歌に関連するものを除けば、右にとりあげた四例をもつて万葉集中の「迎ふ」の用例は尽きる。

「来」を詠みこんでない(4)、あるいは「迎嬌」の(5)なども含め、「迎ふ」がその対象とするものの「向かう」または「来る」といった行為や意向の発動を前提とすることは、どの用例にも共通するいわば固い決まりである。万葉集を離れて、この決まりがどこまで貫かれているのか、保証の限りではないが、少なくとも当該磐姫皇后の八五歌の左注が引く古事記所伝の衣通王の歌は、決まりを逸脱していない。

三、「い帰り来むぞ」と「迎へを行かむ」との対応

さし当り、その歌を、左注ではなく、古事記の原文から次に引用してみる。衣通王が歌をうたう経緯や状況を参照する必要上、左注が省略した部分も含めるが、行論の便宜にしたがい、歌には番号をうっておく。

故、其輕太子者流^ニ於伊余湯^ニ也。亦將^レ流之時、歌曰、
(1) あま飛ぶ鳥も使ひそ鶴が音の聞こえむ時はわが
名問はさね

此三歌者天田振也。又歌曰、

(2) 王^{おほきみ}を島にはぶらば船余りい帰り来むぞ わが疊
ゆめ 言をこそ疊と言はめ わが妻はゆめ

此歌者夷振之片下也。其衣通王献^レ歌。其歌曰、

(3) 夏草のあひねの浜のかき貝に足踏ますな明かし

て通れ

故、後亦不堪^二恋慕^一而追往時、歌曰

(4) 君が行き日長くなりぬやまたづの迎へを行かむ
待つには待たじ

故、追到之時、待懷而歌曰(以下略)

すでに旧稿²で言及してもいるが、この軽太子の密通関連の所伝に歌の占める比重はすこぶる大きく、かつその歌がたがいにいわば有機的なつながりをもって所伝全体の構成に与っている点に大きな特徴がある。引用した右の一節においても、(1) (2) の軽太子の歌と、そのあとに続く(3) (4) の衣通王の歌とがそれぞれ緊密に対応する。

軽太子歌

↑ 衣通王歌

わが名問はさね(1) ↑ ↓ 明かして通れ(3)

船余りい帰り来むぞ(2) ↑ ↓ やまたづの迎へを行かむ
(4)

前者が呼びかけやあつらえといった内容上の対応をもつのに対して、後者は、ともに枕詞を冠した表現により強い決意をあらわす。そしてその決意の内容こそ、前節に万葉集の用例を通して指摘した「迎ふ」をめぐる決まりにほかならない。緊密な対応は、「帰り来む」と「迎へ行く」という組み合わせ相互の、たとえば「帰」と「迎」、「来」と「行」といった逐語的な関係にも及んでいる。

所伝の地の文では、軽太子を追う衣通王の行動にそくして「追往」と表現してはいるが、その王の心情としては、太子の「船余りい帰り来むぞ」というあくまでも帰還を果す決意を表明した歌に應えるべく、逐語的にも対応する表現によつてみずからも決意を表明したことになる。内容、表現ともに対応がそうして緊密なだけに、もとより他の表現をもつて(4)に代えることなどあり得ない。「山たづの」を、わずか一字の違いしかないとはいえ、「山たづね」とすることも、枕詞「船余り」との対応を破るだけでなく、逐語的な対応に破綻さえまねく。それだけでも、歌そのものに変容を来すであろう。

四、「たづぬ」の語性

八五歌は、もはやそれじたい独自の歌とみななければならぬが、その独自を際立たせるのが「山たづね」と「迎へか行かむ」とのかかわりである。「迎ふ」をめぐる前に指摘した決まりに従えば、対象とするものの「向かう」または「来る」といった行為や意向の発動をそれは前提とする。さて、「迎へか行かむ」にその発動を認めることができるであろうか。その句だけならともかく、直後に続く「待ちにか待たむ」と対応的にその表現が成り立つ以上、それとの一体性が強い。どちらとも決めかねる状態のその

一方の、迎えに行こうかどうかというのだから、むしろ発動がないものとみるのが自然である。磐姫皇后にしてみれば、そもそも相手の態度が明確ではない、いわば動静も消息も不明ゆえに、どちらとも決めかねるのである。「山たづね」は、表現上は「迎へか行かむ」に直接つながるけれども、内容に及ぶ関係としてはこの相手仁徳天皇の現況が不明であることにより密接な関連をもつ。

いまそのことを、「たづね」というこの語の万葉集の用例にそくして確かめてみるに、磐姫皇后歌の例を除いてつごう五例しか該当する例がない。そのうち二例が鵜飼に関連したほぼ同じ内容をあらわす。

(a) 年のはに鮎し走らば辟田川^{さきた}嶋^う八つ潜^{かづ}けて河瀬たづねむ (19・四一五八)

(b) 叔羅河^{しくらせ}瀬を尋ねつつわがせこはうかはたたさね情なぐさに (19・四一九〇)

ともに長歌に付随する短歌であり、(a)の題詞に「潜嶋歌」とあり、(b)は長歌の「叔羅河なづさひ^{のほ}浜り平瀬にはさで刺し渡し早き湍に水鳥を潜けつつ」(四一八九)という一節に対応するように、鵜をもぐらせて鮎を捕る漁をよむ。⁽⁴⁾「叔羅河なづさひ^{のほ}浜り」といい、また(a)の長歌にも「山下響み墮ちたぎち流る辟田の川の瀬に年魚^{あめこ}見さ走る島つ鳥嶋養^うともなへ^{かみ}簪^{かんざし}さしなづさひゆけば」(四一五六)

という「なづさひ」ゆきながら鮎のいそうな河瀬をあちらこちら探し求めることが、それぞれ「河瀬たづねむ」(a)「湍を尋ね」(b)とうたう内実である。

この探し求める意のより明らかで、なおかつその対象を遠妻⁽⁵⁾(遠く離れて住む妻)とする例が、「手綱浜歌」と題する次の歌である。地名「手綱の浜」の「手綱」を、音の類似した「尋ね」を起こす序詞とする。

遠妻し多珂にありせば知らずとも手綱の浜の尋ね来なまし (9・一七四六)

『万葉集釋注五』は「地名に興味を感じての歌」また「手綱の浜を尋ねた折の歌だろう」(146頁)とみるが、手綱の浜のある多珂(常陸国多珂郡多珂)に遠妻がいるとしたら、道などしなくても、きつと尋ねて来るのにというのがこの歌の大意である。「せば」と「まし」との呼応を軸に成り立つ歌のなかで、「知らずとも」は「下二句を生かすためのあやにすぎまい」(『万葉集釋注五』同頁)とみなされるだけに過ぎないが、しかし「知らず」であればこそ、あちらこちら遠妻の居場所を探し求めて、つまりどんなに苦勞しても来るといふ作者の遠妻に寄せる熱情を表すことが可能となる。そこに、「せば」と「まし」との呼応とは別に、歌の核心に根ざす「知らず」と「尋ね来」というもう一つの呼応を見ることができるといえる。

残り二例の「たづぬ」は、大伴家持の「臥病悲無常、欲修道作歌」と題する次の歌二首にあつて、同じかたちをとる。

うつせみは数なき身なり山川のさやけき見つつ道を尋ねな(20・四四六八)

渡る日の影に競ひて尋ねてな清きその道またも会はむため(20・四四六九)

この「道を尋ね(て)な」は明らかに題詞の「欲修道」に当たる。「万葉集釋注十」(700頁)に次の解説がある。

俗世を離れることによつて、「道を尋ね」たいというわけである。「道」は題詞にいう道。仏道、悟りへと達する道で、その「道を尋ねな」というのはその道を辿つて悟りの境地に入りたいということである。

「俗世を離れる」とか、またあるいは「悟りへと達する道」「悟りの境地」とかいう説明にどれほど説得力があるのかを計りかねるが、少くとも、願望で表現している、否、願望にとどまらざるを得ないというように、そこに「達する」「入る」道筋やその道そのものの内実まで明確なわけではないであろう。そのことが、すなわちここでもやはりあちらこちら探すほかないという含みにおいて「たづぬ」を使ったものとみて恐らく大過ない。

こうして「万葉集に限れば、「たづぬ」のどの用例も、対

象に対して選択的である。ほばなにがしか不明あるいは不確定といった内容をもつものをその対象とする。この不明や不確定ゆえに、対象を探し、あるいは追い求めることになる。ただし、たとえば前掲「河瀬たづねむ」が、その対象をどこにでもある河瀬ではなく、鮎の潜む特定の河瀬とするように(それが分からないから探し求めるのだが)、「たづぬ」の対象が限定を伴うことが往々にしてある。く

だんの磐姫皇后歌の「山たづね」も、語構成上「河瀬たづねむ」に類することに加え、その対象とする内容じたい同様に夫のいるという特定の山である点が共通する。その山がどこかは不明あるいは不確定だからこそ、磐姫皇后は「山たづね」せざるを得ない。同時に、またそうして夫の所在場所をはじめ現況が不明ゆえに、迎えに行こうか待ちつづけるか決しかねている。「やまたづの」の「迎ふ」に対する枕詞としてのいわば語的关系を越えて、「迎へか行かむ」へと、関係の上では句的性格を強めてつながる点に、「山たづね」の表現上の特質をみるべきであろう。

五、「山」と「山たづね」

もっとも、「山たづね」が夫のいる山を探し求めることだとしても、その山は、本稿の第一節にも言及した通り、現実のたとえば柿本人麻呂の「妻死之後、泣血哀慟作歌」

に「大鳥の羽易の山に吾が恋ふる妹はいますと人の云へば」(2・二二〇)などという死者の埋葬場所を指すわけではない。埋葬の山であれば、人麻呂歌でも「岩根さくみてなづみ来し」(同前)とうたい、またあるいは「悲傷死妻、高橋朝臣作歌」に「吾妹子が入りにし山をよすかとぞ念ふ」(3・四八一)などおよびように場所が明確なのだから、「来」「行く」「よすかと思ふ」とはいつても、「たづぬ」の対象としてはそぐわない。

ただ単に「山たづの」を「山たづね」に改変しただけとみなす素朴にとどまらない以上、やはり「山」と「たづね」との意味的相関の内実を探る必要がある。ここに参照すべき例が、前に採りあげた「遠妻し多珂にありせば知らずとも手綱の浜の尋ね来なまし」の歌である。傍線部の「知らず」を、前述の通りたとえば「妹がり」と吾が去く道の(8・一五四六)などという遠妻のもとに到る道を知らないことと解したけれども、道を知らないと言ひなかに、行きたいのだからどうしても行けないということの比喩的な表現とする例が散見する。

○ 山吹の立ちよそひたる山清水酌みに行かめど道の知らなく(2・一五八)

○ 杖衝きも衝かずも吾は行かめども公が来まさむ道の知らなく(13・三三一九)

くだんの「知らずとも」は、この「道の知らなく」とは逆に、道を知らないのだから行けないが、それを押してなんとしてでも行く(前掲歌では、来る)という表現を導く。前掲歌に表現もあい通じる例を次に挙げる。

淡海^{いそみ}の海奥つ白浪知らずとも妹所と云はば七日越え来む(11・二四三五)

表現に即して歌の成分を組み替えてみるに、二つの歌は次のように互いに対応する。

遠妻し多珂に ありせば	知ら ず	尋ね来なまし
妹所と云はば	とも	七日越え来む

対応上、「尋ね」に当たるのが「七日越え」である。この表現は、「越ゆ」をめぐる表現の類型にそくして、たとえば「白雲のたなびく山を越えて来にけり」(3・二八七)「いや遠に里離り来ぬいや高に山も越え来ぬ」(13・三二四〇)「大王のまけのまにまに丈夫の情ふりおこしあしひきの山坂越えてあまざかるひなに下り来」(17・三九六二)など旅の困難や苦勞を強調する以上に、むしろ誇張した点に独自性がある。歌全体の内容があい通じることにかんがみて、類歌に相当するはずだから、表現上対応する「尋

ね」も同様に誇張だったことは疑いを容れない。

「尋ね」を誇張につかつたこの表現に、くだんの「山たづね」も恐らく通じるであろう。「たづね」の対象であつて、なおかつ「知らず」に関連するという条件を満たすものとしてなぜ「山」なのかといえ、隠すや隠る等にそれが深くかわるからにほかならない。

○ 家離りいます吾妹を停めかね山隠しつれ情^{こころ}神も無し
(3・四七一)

○ はしけやし妻も子どももたかたかに待つらむ君や山
隠れぬる(15・三六九二)

いずれも挽歌であり、傍線部は死をあらわす類型的な表現によるものだが、だからといってそれだけで直ちに死を表すわけではもちろんない。前者は「家離りいます吾妹を停めかね」とのつながり、また後者も家郷に待つ妻子との対比といった歌全体のいわば文脈を支えとして死の比喩表現としてはじめて成りたつ。山をめぐる死を比喩的にあらわす表現には、他にも「高山の鏡の山を宮と定むる」

(3・四一七)「鏡の山の石戸立て隠りにけらし」(3・四

一八)「高山の石穂の上にいませつるかも」(3・四二〇)

「高山の石穂の上に君が臥せる」(3・四二二)「隠口の泊瀬のやまに廬せりと云ふ」(7・一四〇八)「もみち葉の散りなむ山に宿りぬる」(15・三六九三) などをはじめ多彩

な用例がある。そして最後に挙げた例が、前掲「山隠れぬる」とは同じ山をめぐる死の比喩表現として前後に連続する関係にある。

山に隠れ、山が隠すとは、すなわち姿を消すことだから、挽歌ではそれを死の表現に応用したにすぎない。山に隠れ、山が隠してしまえば、死の表現に応用するとおり、もはや姿をあらわさない、だから、それだけ見つけ出しにくく、探し求めるとなれば、困難を極める。またそれだけに、逆に、その困難ゆえに、探し求めることにかける意欲や情熱の強さを浮かびあがらせる。その強さをこそ、「山たづね」は明らかに示唆する。

六、「山たづね」と「迎へか行かむ」との相関

前掲の二つの類歌が共有する「知らずとも」を、この「山たづね」が含みこんでいることは多言を要しない。類歌の二首にもう一つの類歌として並ぶものではないけれども、二首の傍線部「尋ね」「七日越え」が誇張表現だったと同様に、「山たづね」もまた、非常な困難を押して探し求めることにかける意欲や情熱の強さを誇張した表現だったに相違ない。夫の仁徳天皇が山にいるなどの事実にそくしているのでも、またあるいはそれを前提にしているわけでもない。

冒頭に「君が行き日長くなりぬ」とうたい起こすように夫の不在の日がすでに長期にわたっている。この不在をさながら山に隠れ、山が深く隠してしまっているかのごとくみなせばこそ、前掲類歌の「知らずとも」と同様な状況にもかかわらず、それを押してあちらこちら山を探し求めるという比喩表現につながったはずである。しかし、またそうであればこそ、所在場所も消息も不明なのだから、前述のとおり帰還の意向も知り難く、迎えに行くこともままならない。「迎へか行かむ」という意を決しかねる表現が、こうして必然的に導かれることになる。それが、また「待ちにか待たむ」と対比的につらなる。

この歌の成り立ち、いわば表現のつらなりのなかで、どこに最も力点を置いているかといえ、恐らく「山たづね」ではなからうか。長い不在ゆえにその所在の不明を押してなんとしても探し求めようとする妻の、その夫に寄せざる切ないまでの恋情がそこに凝縮されているといっても過言ではない。この「山たづね」のはかない望みを抱きながら迎えに行こうかどうしようかというのが、直後につづく「迎へか行かむ」とのかかわりだが、表現をそのあとの「待ちにか待たむ」と対比的に成り立たせているからといって、そこに表現の重点を置いているわけでは恐らくない。従来、この対比的表現にそくして、磐姫皇后に遅疑や逡

巡などの心の揺れをみるのが通例でもあるが、「山たづね」があつて、それが導く、あるいはそれに対応するものとして「迎へか行かむ」が続くという表現上の関係に照らして、むしろ「山たづね」が凝縮しているはずの不在の夫に寄せざる切ないまでの恋情をこそ磐姫皇后の歌の基調とみなすべきであろう。その恋情が耐えがたいほどに極度に高まった状態をうたったのが次の歌である。

かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し枕きて死な
ましものを（2・八六）

七、「ずは」と反実仮想

この歌についても、本稿のはじめに言及したとおり、特に下句を「山たづね」と内容上関連をもつものとみなす論考がある。八五歌の扱い同様、それらとは別に、あくまで表現にそくして考察を加える姿勢をここでも貫くが、さし当り二つの点に着目してみる。一つが「かくばかり」、もう一つが「あらずは」と「ましものを」との相関である。

わけでも後者に関しては、「ずは」の語法を説く論考の多くが採りあげ、見るべき研究成果も少なくない。そこでまずはこの「ずは」を洗いだすことから始めてみるに、
「ずは」に上接する語のあらわす事態の違いをもとに、表現上いく通りに分類するのが例である。小路一光氏「萬

葉集助動詞の研究』（昭和五十五年二月。明治書院）は、甲、乙の二類に分類する。それぞれに分析の対象として次の例歌（傍線、点、丸も原文通り）を挙げる。

甲類 衣手にあらしの吹きて寒き夜を君来まさずは。独り、かも寝む（三二八二）

乙類 かくばかり恋ひつつあらずは。高山の磐根し枕きて死なましものを（八六）

傍線部「来ます」「恋ひつつあり」をともに「ず」が否定して非現実の事柄をあらわすが、そのあと、甲類は実現が予想されるものを条件としてその帰結を推量（或いは意志）した表現であり、乙類は、非現実といっても単なる仮想（空想）であつて、実現不可能（または極めて困難）なことを条件としてその帰結を仮想（或いは意志）した表現であるというように、条件と帰結との関係を中心にそれぞれの表現上の特徴を指摘する。

これに対して、大野晋氏「万葉集のズハの解釈―助詞ハの機能から見る―」（『五味智英先生追悼 上代文學論叢』昭和五十九年三月。笠間書院）の分析はより詳細にわたる。「ずは」の「ず」が受ける内容（ズの上の動作状態）によつて次のようにまず三通りに分類する。

（イ） その動詞の示す行為・状態はすでに成立し持続していて、それが歌の作者にとつて耐え難く、苦

しく、拒否したいものである場合。

（ロ） その動詞の示す行為・状態は未だ実現していないが、それが作者にとつて好ましく、期待されるものである場合。

（ハ） それは未だ実現していないが、その動詞の示す行為・状態の実現が、作者にとつて予想もできないものである場合。

さらに「ずは」の「は」が、上接する体言・用言の指すところを、他と対比し、問題として設定し、その下に答えを要求する助詞である点から「形式的」に三分類した上で、「先の（イ）（ロ）（ハ）の動詞を否定するズと、このハとの組み合わせによつて奈良時代のズハが成立する。」（46頁）という考えにそくして、各分類項目ごとに該当する用例をもとに具体的な検討を進めている。

ここでは、「ずは」の文法や語法などに深入りする準備も、またその必要もないので、概略を押さえるだけにとどめたいが、当面の八六歌を例に小路氏が示した解釈は、やや大難把にすぎるとはいえ、基本を的確に押さえている。そして大野氏の具体的な検討のなかに、八六歌にも関連する次の指摘がある。

かくばかり恋ひつつあらずは
という数多くの類歌があるが、この句は、実らない自

分の恋に苦しむ作者自身を自嘲する気持あるいは怨みの気持を抱いており、この恋は見込みが無いと焦燥しているわけである。こんな苦しい恋心を抱いて相手を待たせていても駄目だと、そんなことをしつづけていることを否定する。その否定した状態を問題として設定して、(デハドウスルカトイウト)と次へ展開するのがズハである。ところがその場合も、結果はどうもかんなばしくない。(47頁)

このあと、結果について「実現不可能なことなどが終結部に表現されている。作者はその実現不可能なことを観念の中だけでもあそび、言葉として表現している。それが(イ)の歌の型である。」と説く。この部分に至っては、大筋、ほぼ小路氏の指摘と重なりあうことになる。

このかぎりでも、細部にわたっては十分汲みあげているとは決していえないにせよ、「ずは」をめぐる要点はおおよそつくしているであろう。単に文法や語法の分析だけにとどまらず、それによつて成り立つ句や歌の意味・内容にまで踏み込んで考察を加えている大野説は、とりわけ傾聴にあたいているが、しかしその大野説を含め、なお「ずは」がとりもつその上、下面句の相関については詰めきれていないのではないか。この相関こそ、むしろ歌の成りたちの本質に根ざす。たとえば防人歌に次のような「問答」の歌

がある。

置きて行かば妹ばまかなし、待ちて行く梓の弓の弓束にもがも(14・三五六七)

後れ居て恋ひば苦しも、朝獵の君が弓にもならましものを(14・三五六八)

前者が出発前の防人の歌であり、それに応じた妻の歌では、夫が朝獵に携行する弓になりたいとよむ。これに通じる一群の例がある。

(A) 外に居て恋ひつつあらずは、君が家の池に住むといふ鴨にあらましを(4・七二六)

(B) かくばかり恋ひつつあらずは、朝に日に妹が履むらむ地にあらましを(11・二六九三)

(C) 家にして恋ひつつあらずは、汝が佩ける大刀になりても齋ひてしかも(20・四三四七)

右のように当面の「ずは」を含むあい似た内容の歌だが、便宜、「ずは」の直後に読点をうち、「ずは」が受ける上項成分とそれがかかる先の下項成分とに分けている。下項成分は、歌の作者が、現実にはなりえないなにか物にでもなりたいたと仮想(反実仮想)することをあらわす。しかもその物が、上項成分に作者が否定する恋の相手にどの例もちなむ。「ずは」がうける上項成分が共通することは明らかだから、(A)以下の三首ともに同じ表現のかたちをとつ

て成りたつはずである。

さて、防人歌だが、実は(C)も「上総国防人部領使少目従七位下茨田連沙弥麻呂、進歌数十九首、但拙劣歌者、不_レ取載_二之。」という防人関連の歌の一首であることに加え、下項成分が内容の上でもあい通じる。すなわち、仮想する物を「朝獬の君が弓」「汝が佩ける大刀」などの恋の相手の所持品とするが、それはとりもなおさずそうした所持品となつて常に身近にいたいと願うからにほかならない。(A)(B)のそれぞれ「君が家の池に住むといふ鴨」「朝に日に妹が履むらむ地」は所持品ではないけれども、常にそば近くにいたいという切実な願いから仮想したものである点に一致をみる。下項成分としては、表現・内容ともに防人歌と(A)以下の歌とにほとんど違いがないという以上に、同じ成りたちをそこにみるべきであろう。

(上項成分)

(下項成分)

置きて行かば

妹はまかなし

持ちて行く梓の弓
の弓末にもがも

後れ居て恋ひば

苦しも

朝獬の君が弓にも
ならましものを

下項成分を「朝獬の君が弓にもならましものを」とする妻の歌は、夫の歌が防人の旅に「持ちて行く梓の弓」をよむのをうけ、「後れ居て恋」うわが身の立場にひきよせ、残していく「朝獬の君が弓」をもつて応じたもの、当然それは夫が防人などに行かないこと、またあるいは行かずに普段の日常生活を送ることを前提とする。「問答」としての対応にそくした歌の成りたちが複文のかたちをとらせたはずだが、「後れ居て恋ひば」とこの条件のもとに生起する心情をあらわす「苦しも」とを条件と帰結として組み合わせた表現内容を、むしろそれしたい耐え難いものとして恋そのものの否定というかたちに表現したのが、(A)以下の上項成分の「恋ひつつあらずは」にほかならない。

もとより、下項成分が複文構造から成る場合もある。大伴坂上大嬢の贈歌に大伴家持が和した歌だから、防人夫婦の「問答」に類するが、大嬢の歌の「玉ならば手にも巻かむを(うつせみの世の人なれば手に巻きかたし)」(4・七二九)にそくして、

我が思ひかくてあらずは、玉にもが、まことも妹が手に巻かれなむ(4・七三四)

「玉ならば」↓「玉にもが」、「手にも巻かむを」↓「妹が手に巻かれなむ」という対応をなりたせている。贈答という歌の成立に伴う個別の事情が、ここでも「ずは」による表現の画一を破っているという見方が成りたつ一方、個別の事情とはかわりなしに、表現は多様に展開する。

後れ居て恋ひつつあらずは、追ひ及かむ、道の阿廻くまみに標結へ吾がせ（2・一一五）

上項成分を型どおり「ずは」でうけながら、下項成分に、もはや仮想する物など一切あらわすことがない。仮想に代わつて、現実的な実行の意志とそれに関連する要請・依頼とをめぐる表現を組み合わせている。「ずは」による表現のかたちをとりながら、実質はそれを裏切っているかにみえるけれども、しかし実際には、「追ひ及く」ことも、また「道の阿廻に標結ふ」ことなども実現可能な行為として意志し、また要請・依頼しているわけではない。『萬葉集釋注一』の当該歌の解説に、題詞の「勅穂積皇子遣近江志賀山寺時、但馬皇女御作歌」にそくして次の指摘がある。

しかし、それ（道の限みの道祖神に幣を祭り、標を結んで旅の安全を祈ることを皇子にあつらえ、自分は神祈りせずに一挙に道を進めて追いつくこと―榎本補筆）は歌の上だけのことで、皇女があとを追っていく

ことは実際には許されなかったであろう。（280頁）身分や状況を勘案して、つまりは現実に引き戻して考えれば、右の指摘が自然である。

げんに、「歌の上だけのこと」をさながら地で行くかのごとき例がある。笠金村が聖武天皇の紀伊行幸のさい従駕の人に贈るため娘子の依頼により作つたと題詞にいうその長歌の一節に「しかすがに黙もえあらねば、吾が背子が行きのまにまに、追はむとは千遍ちへん念へど」とあり、このあと「手弱たやめ女の我が身」だから道守の問いに答えるすべもなく立ちすくむばかりだとうたう（4・五四三）。この長歌に次の二首の反歌がつづく。

後れ居て恋ひつつあらずは、紀伊の国の妹背の山にあ
らましものを（4・五四四）

吾が背子が跡履み求め追ひ去かば紀伊の関守い留めて
むかも（4・五四五）

後者は、長歌の右に引用した一節以降の内容にほぼ対応する。夫の後を追つて行くとすれば、長歌では道守が問うものとし、この反歌は関守がきつと留めてしまふだろうとするが、もとより「歌の上だけのこと」、夫に追い縋ろうとしてそれのかなわなない妻の深い嘆きをあらわす一種の仮想による表現にほかならない。この歌が「追ひ去く」ことを断念せざるを得ないという内容を仮想するのに対して、前

掲一一五歌は、逆にむしろ「追ひ及く」ことを強く志向する
仮想のかたちをとる。「追ひ及かむ」とは、畢竟、一緒に
居るためだから、それを仮想することは、とりもなおさ
ず前者の五四四歌が下項成分という仮想の「妹背の山にあ
らましものを（妹背の山となつて一緒にいたいのに）」に
明らかに通じる。一一五歌も、かくて、（A）以下の歌と
同じ「ずは」による表現をもとに成りたつ一群の例の一つ
として数えることができる。

しかし、これら一群の例は、恋をめぐる離れ離れの苦
しい現状を否定する「ずは」による表現を上項成分とし、
なおかつその否定をうけ、せめて（いっそ）恋しい人にち
なむ物になりたい（追ひ縋りたい）と仮想する表現（反実
仮想）を下項成分とする組み合わせから成りたつ。仮想が、
常にそば近くにいたい、一緒にいたいなどの現実には実現
不可能な願望にもとづく点に特徴をみることができる。離
れ離れの恋だから、この仮想も自然といえは自然だが、人
情の然らしむるところ、この恋は、もう一つの仮想のかた
ちをもつ。それが、すなわち死の仮想である。

八、「恋ひつつあらずは」と死の仮想

この死を仮想するかたちをとる表現にも、また一群の用
例がある。くだんの磐姫皇后の八六歌は、実はこの一群に

属する。「ずは」をめぐる文法その他表現や構成にいたる
まで、前節にあらまし述べた内容と違いがあるわけではな
く、どこまでも意味にそくした分類だから、もはや立ち入
った説明には及ばないであろうが、特徴としては、恐らく
死を仮想することに関連して、上項成分と下項成分とを逆
転させたかたちをとることがある。倒置表現により死の仮
想を強調するものであろう。次にそれらを一括して挙げる。

- （1） 秋萩の上に置きたる白露の消かも死なまし、恋
ひつつあらずは（8・一六〇八。弓削皇子御歌）
- （2） 秋萩の上に置きたる白露の消かも死なまし、恋
ひつつあらずは（10・二二五四。秋相聞、寄露）
- （3） 秋の穂のしのに押し靡べ置く露の消かも死なま
し、恋ひつつあらずは（10・二二五六）
- （4） 秋萩の枝もとををに置く露の消かも死なまし、
恋ひつつあらずは（10・二二五八）
- （5） 剣刀諸刃の上に去き触れて死にかも死なむ、
恋ひつつあらずは（11・二六三六）
- （6） 住吉の津守網引の泛子の緒の浮かれか去かむ、
恋ひつつあらずは（11・二六四六）
- （7） 白浪の来寄する島の荒磯にもあらましものを、
恋ひつつあらずは（11・二七三三）

右の例の全てが「恋つつあらずは」を下句とする。上句は、

倒置による強調表現から成り、(1)と(2)が完全に歌全体を一致させているほか、「秋」また「露の消かも死なまし」の表現を(1)と(4)の各歌が共有する。互いに類歌の關係にあるに違いない。

一方、(6)(7)は死を仮想してはいない。(6)では、仮想を「浮かれか去かむ」とするが、『萬葉集釋注六』にこの句について「諸注のいうように本籍を離れて浮浪者になることをこめる表現であるならば、全体はかなり強く響く。もっとも、この句は、『山をも川もしらず』(二四一四)にさまよい行くことを思つての表現と見ることもできる。」(289頁)と説く。しかし「本籍を離れて浮浪者になることをこめる表現」という諸注の見解には、従いがたい。養老令(戸令第八「絶貫条」17)に「凡浮逃絶貫」という浮浪して無籍者となることを指すはずである。この条の義解には「律によるに、亡にあらざして他所に浮浪して賦役を闕く物は亡法によれと。」と律の規定を引くが、浮浪して賦役を欠くものは亡法の適用をうける。古く天智天皇の時代に施行の庚午年籍に関して日本書紀(天智天皇九年二月条)が「造_ニ戸籍、断_ニ盜賊与_ニ浮浪_一」と伝えるように取締りの対象でもある。浮浪してしまえば、戸籍からも断絶してはや一人前の人たりえないが、いっそのことそうしてしまいたいというこの句の意味するところは、死の仮想

に当然通じる。(7)の「白浪の来寄する島の荒磯」にいたつては、世間のみならず人からも最も遠く離れたもの、あるいは対極にあるもの、もちろん恋などしない、感情などもないものの究極の比喩として想定されたに相違ない。そんなものであったらいいのになどと仮想することは、死の仮想にほとんど重なるであろう。

その重なるの核が、すなわち恋する自分を可能なかぎり人間から隔絶した存在として仮想すること、いわば究極的な自己否定の仮想である。倒置のかたちをとらない例も、とりどりにその仮想の多様なあらわれをみせる。次にそれらをまたまとめて挙げる。

(8) かくばかり恋ひつつあらずは、石木^{いは}にもならましものを、物思はずして(4・七二二)

(9) なかなかに君に恋ひずは、枚の浦の白水^あ郎^きならましを、玉藻^{たまも}苅^{かり}りつつ(11・二七四三)

(10) なかなかに君に恋ひずは、留^{とど}牛鳥^{うす}の浦^{うみ}の海部^{あま}にあらましを、珠藻^{たまも}苅^{かり}る苅^{かり}る(11・二七四三の左注所引「或本歌」)

(11) 後れ居て恋ひつつあらずは、田子の浦の海部^{あま}ならましを、珠藻^{たまも}苅^{かり}る苅^{かり}る(12・三二〇五)

(9) 以下の三首は明らかに類歌であり、(8)もまた、表現の構成上、それらと一つに括りうる。いずれも、仮想

による表現のあと、その仮想したもののありかたを付加的にあらわす。(8)の物思われないとする石木については説明するまでもないが、(9)以下にいう玉藻茹るあまは、恐らく「あまをとめ」を指す。

淡路島松帆の浦に 朝なぎに玉藻茹りつつ 夕なぎに藻塩焼きつつ 海人^{あまをとめ}娘子ありとは聞けど 見にゆかむよしの無ければ(以下略。6・九三五)

玉藻茹る海人娘子ども見に行かむ舟楫もがも波高くとも(右の反歌・九三六)

これやこの名に負ふ鳴門のうづ潮に玉藻茹るとふ海人娘子ども(15・三六三八)

聖武天皇の播磨の国印南野への行幸にさいして笠金村が作った右の長歌と反歌の解説に、『萬葉集釋注三』が「娘子はその土地に繁茂する植物やその土地の古びた霊木などと同じく、金村にとって、旅先の躍動の象徴であつたようだ。」(35頁)と指摘する。金村にかぎらず、こうした珍奇な物同様にみなす見方がむしろ一般的ではなかつたろうか。石木に類い、物など思はずらうことなくひたすら作業に励むといった意味を付加するところに、わざわざ「玉藻茹る茹る(茹りつつ)」を添えるねらいをみることができ。

さて、最後が死の仮想をめぐる一連の用例である。倒置でもなく、また説明を付加させてもいない、それだけに表

現構造の上ではごく単純であるが、このなかにくだんの磐姫皇后の歌が位置する。

(12) かくばかり恋ひつつあらずは、高山の磐根し枕きて死なましものを(1・八六)

(13) 吾妹子に恋ひつつあらずは、荇薦の思ひ乱れて死ぬべきものを(11・二七六五)

(14) いつまでに生かむ命ぞ、おほかたは恋ひつつあらずは、死ぬるまされり(12・二九一三)

(15) 吾妹子に恋ひつつあらずは、秋萩の咲きて散りぬる花にあらましを(2・一二〇)

(16) 長き夜を君に恋ひつつ生けらずは、咲きて散りにし花ならましを(10・二二八二)

死を明示する(12)と(14)と明示しない(15)(16)とに分かれるので、類歌の關係にある後者をまずみるに、「散りぬる花」「散りにし花」と共に完了の助動詞(と、後者は過去の助動詞と)によつて散つてしまつた状態の花をあらわす。反実仮想の多くが、たとえば前節の例がそうであるようにかくありたい、したいという将来に向けた行為の実現を仮想するのは逆に、既に散りおえた花であればよいのにと仮想することは、(16)に「生けらずは」と現に恋して生きている今の状態を否定してもいるが、恋に苦しんで生きるその状態に至らないこと、すなわち死を願うこ

とにほかならない。『萬葉集釋注五』の「咲いて散つてしまつたあの花である方がよかつた」(91頁)という「た」を重ねる訳は、過去にさかのぼつてその死があればよかつたのという隠れた真意を巧まずして汲んでいる。

物になることを仮想する表現は、恋する相手のま近に居たいという願望をあらわす前節に採りあげた例に通じるけれども、完了した状態を仮想するなどといったことは、この(15)(16)以外には例がない。仮想が死にかかわるからにほかならないが、その同じ理由によつて、また(13)(14)も特殊である。(14)は、実は反実仮想によるものではない。命の有限を前置した上で、恋なんかして(苦しんで)いないで、死ぬことがまさつていふというように死の優位をいう。いわば判断を加えている。生のありかたにかんがみて判断を下したこの(14)に對して、むしろ當為としての死の選択といった性格の色濃いのが(13)である。恋をうたつてはいないが、類歌に次の例がある。

驗無き物を念はずは、一杯の濁れる酒を飲むべくある
らし(3・三三八)

甲斐のない物念いなどせず、飲酒するほうがましであるらしいというごく明快な内容である。(13)歌も、これと同じように「千々に思ひ乱れて死んだほうがましだ」(『萬葉集釋注六』の訳)と、死を肯定したものとみるべきなのか。

しかし下項成分「荊薦の思ひ乱れて死ぬべきものを」をめぐつては、くだんの歌の直前に位置する次の歌が全く同じ表現から成り、

妹がため命残せり、荊薦の念ひ乱れて死ぬべきものを

(11・二七六四)

恋する人のため生きながらえている、死ぬべきなのにとあり、死ぬべきなのに恋しい人のために死ねないという死を否定する意が明確である。愚直にこれを(13)歌の解釈に採りいれれば、大筋、恋してなんかいないで、いつそのこと死ぬべきなのに、あるいは死ぬほうがましなのに(死ねない)となる。さて、しかしこうして上項成分で恋を否定する一方、下項成分では死を否定するとなると、もはや「ずは」の表現による死関連の歌のたとえば「露の消かも死なまし、恋ひつつあらずは」といった倒置のかたちをとる例とは大きく隔絶するにいたる。それだけ独自でもあるそのもとを實せば、「ずは」による表現と「荊薦の」以下の下項成分との組み合わせが大きな要因として考えられるが、組み合わせ自体は、下項成分を共有する直前の歌との関連なくしてはありえなかつたのではなからうか。

最後に残つた(12)歌、すなわちくだんの磐姫皇后の歌も同様に独自ではあるけれども、下項成分に死関連の表現をまじえる従前の例とは明らかな違いをみせる。「死ぬる

まされり」(14)と判断を下したり、「死ぬべきものを」(13)と嘆いたりするいわば男の歌ではない。「ましものを」の結びは「花にあ(な)らましを」(15・16)に通じるが、これが実際には実現不可能ものなることを願望する反実仮想の、前節に述べた表現のかたちをとる典型的な例であるのに対して、その対象とする「高山の磐根し枕きて死」ぬことが反実、つまり実際には実現の不可能なことかといえ、皇后の身分などの条件を別として、純粹に表現だけに限れば、決してそうではないであろう。だから、類例の候補には、むしろ「露の消かも死なまし、恋ひつつあらずは」(1・4)また「死にかも死なむ」(5)などがなりうるが、「ましものを」との違いは無視できない。

結局、磐姫皇后の歌の類歌を追ってその果てにたどり着く先が、この歌じたいにたちかえるという基本にほかならない。「死なましものを」だから、(13)およびこれと下項成分を共有する前掲歌の「死ぬべきものを」と同じように現実にも実際上も死ねないことの自覚が根底にある。げんに、歌の内容をみても、上項成分に「かくばかり恋ひつつ」という現状の内実は、八五歌に「山たづね迎へか行かむ待ちにか待たむ」とうたう前述のとおり不在の夫に寄せる切ないまでの恋情である。これが直ちに人を死に追いやるとは、もとより認めがたい。またそうであればこそ、完

了や過去の助動詞を使った「咲きて散りぬる(にし)花にあらましを」という死んでしまっていたらよいのなどの反実仮想による表現も採りえなかったに相違ない。

九、「かくばかり」をめぐる表現

こうして磐姫皇后の歌が磐姫皇后の歌たりうる最大の根拠が、実は直前に位置する八五歌にあることは疑いを容れない。しかし、だからといって「八六歌の『かくばかり』の指示語『かく』は、歌群としての把握では、前の八五歌の内容を指示する」(前掲廣川氏論考。113頁)、またあるいは「『かく』は、ここは前歌の下三句をさす」(『萬葉集釋注一』244頁)などの指摘は、八五歌をうけるその実態を必ずしも的確に捉えたものではない。だい一、「かくばかり」を「かく」と「ばかり」とに分けて解釈することじたいに、実は問題がある^⑩。

「かくばかり」の管見に入った二十三例全てを逐一採りあげることではできないが、用例のあらわれにそくして、いくつかにわけながら考察を加えてみるに

(1) なかなかに絶ゆとし言はば、かくばかり息の緒
にして吾恋ひめやも(4・六八一)

(2) 凡に吾し念はば、かくばかり難き御門を退り出
めやも(11・二五六八)

これらに「かく」の指示する明確な対象がないことは、一見して明らかである。また「かくばかり」が直後の「息の緒にして」「難き御門」にかかるだけでなく、前者は修飾の作用によつて「吾恋ひめやも」と、そして後者も行為の対象として「退り出めやも」とそれぞれ一体的に結びついたそのまとまりに、意味の上でつながっていることも明白である。そのつながりのなかで、否定的意味を強めるはたらきを、この「かくばかり」は明らかにもつ。右の(1)

(2)ともに、つながりの結び「やも」といわば文脈的に呼応する関係をそこに見ることができる。

(3) 古りにし^{おみ}姫にしてや、かくばかり恋に沈まむ、
手童児^{たわらは}のごと(2・一二九)

(4) 丈夫と念へる吾を、かくばかりみつれにみつれ
片念をせむ(4・七一九)

右の「む」とも、やはり呼応的な関係にあつて、(3)ではみずからあされるばかりだといった意味を、また(4)でもあきれ、自嘲する意味を帯びる。

こうした「かくばかり」で始まるその一体的な結びつきは句(帰結)に相当し、上接する句(接続助詞がうける条件句)との間に句関係(逆接ないしこれに準じる)を構成するが、接続助詞「て」がうける句の場合、

(5) むら肝の情^{くた}推けて、かくばかり余^あ恋ふらくを知

らずかあるらむ(4・七二〇)

(6) 朝髪の念ひ乱れて、かくばかりなねが恋ふれぞ
夢に見えける(4・七二四)

その句が修飾句となつて、それぞれ「かくばかり余恋ふらく」「かくばかりなねが恋ふれ」にかかる。かたちの上では、「かくばかり」がその句の内容を指示しているかのように見えるけれども、恋の否定的なありかたを具体的に形容する修飾句をうけて、その恋をめぐる否定的な意味あいを強める。また「かくばかり」に上接する成分が、接続助詞がうける句ではなく、そこで一旦意味の上でも終止する文相当に拡大しても、表現の構造上はなら変わりがない。たとえば次の例。

(7) (前略) ぬばたまの夜昼と言はず念ふにし吾身

は瘦せぬ嘆くにし袖さへ沾れぬ。かくばかりもとなし恋ひば古郷に此の月ごろも有りかつましじ
(4・七二三)

(8) (前略) いとのきて短き物を端^{はし}きると云へるが

如し楚^{しよ}取る里長が声は寝^や屋^や処^とまで来立ち呼ばひぬ。
かくばかりすべなき物か世間の道(5・八九二)

前者は「大伴坂上郎女從^三跡見庄^二賜^一留宅女子大嬢^二歌^一」と題する長歌であり、前掲(6)を反歌とする。長歌が大嬢に寄せる母郎女の愛情を「袖さへ沾れぬ」までに具体的に

あらわすのに対して、大嬢をさす「なね」のその母に寄せる愛情を思いえがいたのが(6)の「朝髪の念ひ乱れて」である。恋こがれて異常をきたすほどの状態をそれぞれに具体的にあらわし、「かくばかり」以下の母と娘のたがいの恋のありさまを形容する。こうして表現内容とも対応し、かりに「袖さへ沾れぬ」の「ぬ」を「て」に置き換えれば、ただちに(6)に連続する。(8)も、表現の成り立ちのうちでは、(7)とほとんど変わりが無い。ただ、(前略)の部分が大長にわたるぶん、その最後の「来立ち呼ばひぬ」の終止が際立ち、「かくばかり」以下の句との関係がみえにくいだけに、たとえば『かく』は、『わくらば』に以下『来立ち呼ばひぬ』に述べられた内容をさす。」「(『萬葉集釋注三』15頁)といった見方も、一面では否めない。しかし一方、同じ「かくばかりすべなき」のかたちをとる次の例は、その見方は当てはまらない。

(9) たちねの母が手離れ、かくばかりすべなき事
はいまだせなくに(11・二三六八)

「母が手離れ」に「て」を補えば(5)以下の例に並ぶが、「かくばかり」以下との関係の意味としては起点を表すように、「かく」を、それだけを切り離して指示語とみることは実態にあわない。

そしてその実態だが、これまで採りあげた用例は、どれ

も「かくばかり」以下が句相互の関係の下項に立ち、表現の上で「かく」が上項の句ないし句的まとまりを指すとみなす見方が、従来は一般的である。実は、それらでさえ全体の半数にも満たない。残りの大半は、歌の冒頭に「かくばかり」が位置する。しかも、この語にはじまる上項成分が条件句を構成し(つまり接続助詞でうけ)、下項成分との間に関係の意味をあらわす。条件句は、意味上、いくつかに分類することが可能である。まずは単純な接続助詞「ば」による例。

(10) かくばかり恋しくあらば、真澄鏡見ぬ日時なく
あらましものを(19・四二二)

(11) かくばかり面影にのみ念ほえば、いかにかもせむ、人目繁くて(4・七五二)

また逆接と倒置表現の例だが、次の二例以外にはない。
(12) かくばかり雨の降らくに、霍公鳥卵の花山にな

ほか鳴くらむ(10・一九六三)

(13) 表辺なき妹にもあるかも、かくばかり人の情を
尽くさく念へば(4・六九二)

次に「かくばかり恋ひむ(ものそ)」のまとまりを対象とする知覚動詞が助動詞と「ば」を伴って条件句を構成した、たぶん典型的な例がいくつかある。

(14) かくばかり恋ひむとかねて知らませば、妹をば

見ずあるべくありける (15・三七三九)

(15) かくばかり恋ひむものそと知らませば、遠く見

べくもあらましものを (11・二三七二)

(16) かくばかり恋ひむものそと知らませば、その夜

は寛^{ゆた}にあらましものを (12・二八六七)

(17) かくばかり恋ひむものそと思はねば、妹が手本

を枕かぬ夜もありき (11・二五四七)

前三者に「知らせまば」とあり、過去に予知できたらと仮定した上で、その場合のしかるべき、また望ましいありかたを仮想した内容を下項成分があらわす。その予知できなかった現実のままを上項成分に表現した例が、最後の(17)である。下項成分は、当然すべきだったのにそうできなかつた事態をあらわす。そこには、失望、落胆、悔恨といった負の心情が色濃い。今陥っているこうした心情をもたらすことになるその正体こそ、「かくばかり恋ひむ(ものそ)」という予知不能な、また受忍限度を越える恋にほかならない。

この(14)以下の例が、たとえばそこに「かねて」と限定するとおり過去に軸足を置いたかたちをとるのに対して、今あるその現状にそくして成りたつ一群の例がある。予知に替わつて、この例を特徴づけるのが「つつ」である。現在進行中であることを明確に示す。

(18) かくばかり恋ひつつあらずは、高山の磐根し枕

きて死なましものを (2・八六)

(19) かくばかり恋ひつつあらずは、石木にもならま

しものを、物思はずして (4・七二二)

(20) かくばかり恋ひつつあらずは、朝に日に妹が履

むらむ地にあらましを (11・二六九三)

「ずは」に関連してすでに採りあげた例ばかりであり、ここでは主に下項成分の意味・内容を中心に考察を試みたが、上述の例に明らかなとおり上項成分全体の否定的な意味を強めるはたらきがこの「かくばかり」には著しい。かたちの上では、とりわけそれが歌頭に立つ(10)以下の例に類する。しかし耐える限界を超えて進行中の恋のその(苦しき)程度を「かくばかり」が強調した上で、その恋をそっくりそのまま否定するといった点では、否定的な意味を強める働きの、右三首がその最たるものといつても過言ではない。

また一方、下項成分とのかかわりでは、右のように恋をみずから否定するのとひきかえに、それはおのれ自身を否定することでもあるから、人間以外の物になることを仮想する(19)と(20)に連続する。恋とは無縁の木石になりたい(19)とか、毎日身近に居るため恋する相手の履む地になりたい(20)とかの、まさに非現実、反現実の仮想に

類して、(18)の磐姫皇后歌も、「高山の磐根し枕」く行き倒れの死を仮想することに現実味は確かに乏しい。しかしながら、行き倒れの死が実際に起こる以上、仮想とはいえず、自死を願うことにそれは明らかに通じる。恋そのものから、ひいては自身の否定すら含意する上項成分にそくして、その否定を実質化する上に、この行き倒れの死を仮想する表現は極めて効果的であり、その効果を狙ったそれが意図によることは疑いを容れない。ちなみに、「高山の磐根し枕きて」というこの表現じたいも、八五歌の「山たづね」に對するものであろう。すでに小稿の始めにそれに関連する先学の説を採りあげているが、断るまでもなく、その対応はどこまでも表現上のつながりにすぎない。

十、「かくばかり」による八五、八六歌の相関

たとえ仮想ではあっても、悲惨この上ない行き倒れの自死を願うことは、恋の否定とあいまって、もはや恋を持続する限界、ないし極限を意味するであらう。その一方、所詮それは仮想に過ぎないから、恋に耐える現実に変わりはない。こうした恋をめぐる仮想と現実との狭間にあえいでいる状態が、八六歌にうたう内実にはかならない。

さて、ここで一連の磐姫皇后歌群のなかにこの八六歌が占める位置をみるに、「かくばかり」に始まる表現の構成

上、類似の例が前掲(7)の坂上郎女歌である。その「かくばかりもとなし恋ひばく有りかつましじ」が八六歌に当たるとは明らかだから、全体は次のような対応が成り立つ。

ぬばたまの夜昼と言はず
念ふにし吾身は瘦せぬ嘆
くにし袖さへ沾れぬ

(君が行き日長くなり
ぬ山たづね迎へか行
かむ待ちにか待たむ

←

←

かくばかりもとなし恋ひ
ば、古郷に此の月ごろも
有りかつましじ

かくばかり恋ひつつあ
らずは、高山の磐根し
枕きて死なましものを

||

ともに「かくばかり」で否定的意味を強める恋のその具体的なありさまを、それに先行する一節が形容する。内容上の関係では、恋をめぐつてその先行する前段が否定的なありさまを行為にそくしてあらわすのに對して、それを引きつぐ後段の「かくばかり」以下がもつばら心情にそくして耐えがたいさまを強調する。

この表現の構成にかがみて、磐姫皇后歌が坂上郎女歌同様、それぞれ八五歌は行為を中心とし、つづく八六歌が心情を中心とした前後に對應する二首一組のセットとして

成りたっていることは明らかである。そしてこの二首一組のセツトの關係を、次に続く八七歌と八八歌がひき継ぎ、あたかも相似の二首一組のセツトをかたちづくる。すなわち、表現に限っても、八五歌の「待ちにか待たむ」を基に、これにそくして八七歌の「君をば待たむ」へ展開し、まさにこの待つ行為をめぐって八七歌の表現は成りたつ。一方、八六歌の「恋ひつつあらずは」に通じるのが八八歌の「いつへの方に我が恋止まむ」である。ともに恋の心情にそくして、その否定を八六歌が反実仮想の表現により、また逆にその継続を八八歌が反語の表現によりあらわす。

十一、「ありつつも」をめぐる表現

内容も当然こうした表現上の対応に伴う。各歌相互のその関連をここに逐一論じる余裕はもはやないが、歌群の構成に関して、右のように理解する上にその前提としても押さえておくべき点があるので、最後にそれを採りあげてみる。具体的には八七歌冒頭の「ありつつも」だが、従来も、この語をめぐって歌群の構成が論議されている。そのうち有力なのが次に挙げる稲岡耕二氏の説である¹⁾。

「在りつつも君をば待たむ」は、このままずっと待ち続けようの意で、(中略) a 歌につづく歌としては、「居明かして君をば待たむ」(八九)のように、一夜

を戸外で待ち明かす程度の短い時を指すとは考えられない。何時までも待ち続ける状態の極点として「黒髪に霜のおくまでに」という詠嘆があると云つて良いだろう。b と c とは「迎へか行かむ待ちにか待たむ」と揺れる a の心理の一方を、それぞれ強調吐露する形になっている。(28頁)

a、b、c はそれぞれ八五、八六、八七歌をさす。「在りつつも」を「このままずっと」と捉えてなんら検証することなく、そのまま各歌の關係に説き及ぶ²⁾。しかしその解釈は、「ありつつ」に当てはまることがあつても、当面の「ありつつも」の実態にはそぐわない。

「ありつつも」についても、用例のあらわれにそくしていくつかに分けることが可能である。便宜に従い、そのグループごとに考察を加えるとして、「ありつつも」の全十一例のうち、最多の数を占めるグループの用例をまずは次に列挙する。

(1) 佐保河の涯きしの官つかさどの柴しばなわら苅はりそね、ありつつも春
し来たらば立ち隠るがね(4・五二九)

(2) 此の岡に草苅る小子わらはな然しか苅りそね、ありつつも
公が来まさむ御馬草にせむ(7・一二九一)

(3) 岡前のたみたる道を人よきな通ひそ、ありつつも公
が来まさむ曲道まがみちにせむ(11・二三六三)

(4) ありつつも御見したまはむそ、大殿の此のもと
ほりの雪な踏みそね (19・四二二八)

どの歌も、禁止表現による句(波線部)を伴う。(1)

(2) は、それぞれ柴、草を茹ることを禁じる。春になったらそこに逢瀬のために隠れるだろうから、また恋人が乗って来た馬の秣にしようなどと、その有用をことさら挙げなければ、すなわち通常なら茹られてしまうものだからである。(3) も、通常は人が通る回りを、恋人が通って来る抜け道にしたいという理由から、通行を禁じている。

(4) は、長歌の「大殿の此の廻りの雪な踏みそね、数も降らぬ雪そ山のみに降りし雪そ、ゆめ縁るな人やな履みそね雪は」(四二二七)と人が雪を踏むことを厳しく禁じた内容をうける反歌であり、禁止の理由に「御見したまはむそ」を挙げる。通常は人が踏んでしまうものだからこそ、厳しく禁止する必要がある。このまさに通常は人が踏んでしまうような雪(4)、通常は人が通うような回り道(3)、通常は茹てしまうような柴や草(1・2)などに、本来それほど有用性があるわけではない。それにもかかわらず、その現にあるがままの状態であっても、そのものを有用とするというのが「ありつつも」をめぐる表現の論理にはかならない。

(5) 山吹は撫でつつおほさむ、ありつつも君来まし

つつかざしたりけり (20・四三〇二)

山吹を君が髪飾りにしたことが、それまでは価値の無かった山吹を有用にした、だからこれからは大切に育てようという内容である。傍線部の「ありつつも」は、本来なら髪飾りにしてくれることなど望むべくもない山吹なのに、そのあるがままではあつてもといった逆接の意を内包する。この「ありつつも」をめぐる逆接の相関が顕在化しているのが、序詞に伴うかたちをとる次の例である。

(6) 安太多良の嶺に臥す猪のありつつも、我は到らむ寝処な去りそね (14・三四二八)

(7) 伊豆の海に立つ白浪のありつつも、継ぎなむものを乱れしめめや (14・三三六〇)

前者が陸奥国、後者は伊豆国とともに東歌であり、表現も類似する。前者は、禁止表現による句をもつという点では(1)以下の例にも通じるが、「安太多良の嶺に臥す猪の」が「ありつつも」を起こす序として位置する。この序について、従来「鹿猪は同じねぐらに棲む習性がある。(中略)いつも同じねぐらにいるようにの意で『ありつつも』を起こしつつ、結句と響き合う。」(『萬葉集釋注七』語釈。392頁)といった解釈が有力である。しかしここに鹿猪の習性を踏まえなければ、歌を理解しえないとは考えがたい。むしろ安達太良山の奥深い嶺に人知れず臥す猪のように、家

の奥深い寝処に臥したままの状態にいるにしても、という序と「ありつつも」との関連をうけ、恋する相手に対して、「我は到らむ寝処な去りそね」と呼びかけたものとみるべきであろう。

(7) もまた、一般に「波が続いて寄せ、絶えないことから、第三・四句を起こす序とした。」とみなすが、これでは序の「伊豆の海に立つ白浪」にそぐわない。たとえば「大海に立つらむ浪は間あらむ」(11・二七四一)という実態に背くばかりか、「若の浦に白浪立ちて奥つ風」(7・一二一九)、「新治の鳥羽の淡海も秋風に白浪立ちぬ」(9・一七五七)という風が海に白浪を立てるのが自然、またそれゆえに「風吹かぬ浦に浪立ち無かる名を吾は負へるか逢ふとは無しに」(11・二七二六)というありもしない浮名を負う不自然に引きあいに出される。風によって伊豆の海に立つ白浪のように心が波立つ状態にいるにしても、それにもかかわらず二人の仲を続けていきたいという「継ぎなむものを」が逆接的につづく。そうして仲を続けたいのに、どうして心を乱れさせることなどしましょうと、(6) 歌と同じく恋の相手にうたいかける。「ありつつも」は決して好ましい状態ではないが、直後にその状態への対処をいい、最後にそれに関連して相手に対する意向や思いをつたえるというのが、この(6)(7)に共通する

表現のかたちである。

こうした表現のかたちの上では、むしろ(1)以下のグループに通じる例がまた別にある。たがいに表現の似かよう次の二例だが、

(8) 九月の有明の月夜ありつつも君が来まさば吾恋

ひめやも(10・二三〇〇)

(9) 今夜の有明月夜ありつつも君を置きては待つ人
もなし(11・二六七一)

一般に上二句を「あり」もしくは「ありつつも」を起こす序とみる。「ありつつも」については、主語を、(8)は恋の相手とみて「これからずっと続けてあなたがおいで下さるならば」とする解釈(『萬葉集釋注五』686頁)がある一方、「主語は作者(私)である。」(渡部和雄氏の注(12)所掲論考。8頁)とみる見方の二通りがある。これに対して(9)は、「結句『待つ』に続く。」として「あり続けて夜どおし待つ人は」と解釈(『萬葉集釋注六』313頁)するのとおり、主語を作者とみるのが一般的である。

しかし、「ありつつも」をめぐる、同じ表現の序が同じように起こすその語の主語が異なるとは、この場合は特に考えがたい。前に採りあげたなかのたとえば(1)が柴を主語として「ありつつも春し来たらば立ち隠るがね」とつづくように、「月夜」をその主語とみてなんら矛盾はな

い。ただし、柴が本来有用ではないのに、春が来れば有用となるという表現を、ちょうど裏返したかたちをとる。すなわち、その主語の「九月の有明の月夜」とは、有用ではないどころか、逆にまたとない賞美の対象である。「詠月」と題する歌に、

白露を玉になしたる九月の有明の月夜見れど飽かぬかも (10・二二二九)

さながら恋の相手であるかのようにむが、実は(8)の例は「寄月」と題する歌群のなかの次の歌の直後に位置する。

秋の夜の月かも君は雲隠りしましく見ねばここだ恋しき (10・二二九九)

無性に恋しいものとして恋の相手を月になぞらえているこの歌につづいて、「九月の有明の月夜」を恋の相手「君」と対比的によむのが(8)である。「見れど飽かぬかも」と賛嘆措くあたわざる「九月の有明の月夜」がそのままの状態でありつづけても、恋の相手がおいでになれば、もはや恋したりなどしないという承接関係は、(1)以下の例とは逆に、恋の相手の来臨が有用を無用に変えることをいう。内容がそうして裏返しになってはいても、表現の構造じたいに違いがあるわけではない。次の(9)は、「恋ふ」が「待つ」に替わっているが、その相手として、

あしひきの山より出づる月待つと人には言ひて妹待つ
吾を (12・三〇〇二)

「月待つ」より「妹待つ」が本音であるように、「今夜の有明月夜」がそのままあり続けようとも、あなた以外に待つ人はいないという。「有明月夜」を主語として、それが本来は賞美すべきものとしてあるにせよと逆接的に続くこの「ありつつも」をめぐる表現の基本構造を、(1)以下の例と別なく明らかに見てとることができる。

十二、「ありつつも」による八五、八七歌の相關

このほか、くだんの磐姫皇后歌とは別に、もう一例「ありつつも」をよみこんだ歌がある。この歌に独自の表現がそこにかかわり、それが「ありつつも」に関する前述の基本構造から外れているわけでも、ましてや構造の存在そのものを覆すものでもないで、ここでは保留するとして、最後に残った磐姫皇后歌の例を採りあげてみる。「ありつつも君をば待たむ」というこの表現のかたちには、既述したなかの(4)がもつとも近い。同じく歌の冒頭にいきなり「ありつつも」が立ち、その直後に助動詞「む」に「そ」を加えて結ぶ「御見したまはむそ」が続く。行為の対象を明示してはいないが、前述のとおり「大殿の此のものとほりの雪」がそれに当たる。人が踏んでしまいそうな雪

のその降り積もったそのままの状態ながら、それを御覧になるといふ。句末の助詞「そ」に込めた強意も、「君をば待たむ」の強い意志をあらわす表現に通じる。

この（４）には、すでに全文を挙げているが（10頁参照）、長歌が先行する。そこにも「大殿の此の廻りの雪」とうたうこの雪にそくして、反歌が「ありつつも」とうたい起こしていることは疑いない。表現の一致にかんがみて、磐姫皇后歌の「ありつつも」でも、その主語となるものに雪と同じように、直後に続く行為の対象をもって当てるのが筋である。もちろん、「君」が主語に当たる。八五歌に

八五 君が行き日長くなりぬ

（山たづね迎へか行かむ）待ちにか待たむ

（かくばかり恋ひつつあらずは―八六）

（ 君 ）

←

（ 我 ）

←

八七 ありつつも

君をば待たむ（吾が黒髪に霜の置くまでに）

（いつへの方に我恋ひ息まむ―八八）

前述のとおり磐姫皇后歌群は、二首一組のセットを二つ連ねた四首から成りたつ。各組ともその前後二首の前歌のほうが行爲中心の表現をかたちづくっていることも共通する点であったが、まさに右の対応がその具体にほかならない。四角枠内の上段が夫の長い不在をめぐる表現であり、八五歌をそのまま八七歌が引き継ぐ。下段が、磐姫皇后の劇的な変化をあらわす。不在の夫に対する二つの対処のいずれ

「君が行き日長くなりぬ」というようにこの「君」は、長く不在が続いている。

「君」は柴や草、あるいはまた雪や山吹などではないけれども、長く不在が続く以上、いわば、決して有用とはいえないもの同然である。そうみなせばこそ、「ありつつも」を、この語をめぐる表現の基本構造にそくしてことさらに選びとつたはずである。もちろん、直後の「君をば待たむ」に對しては逆接的にかかる。また一方、歌群の構成の上では、八五歌と次のような対応をかたちづくる。

を選択すべきか決めかねているという八五歌から、明確な決意をあらわす八七歌にあざやかに転換を遂げる。

この転換には、それが決然とした意志に基づく以上、当然、恋をめぐる心情の変化が伴う。それが、八六歌の恋の否定から転じた八八歌の「いつへの方に我恋ひ息まむ」である。上句に「秋の田の穂の上に霧らふ朝霞」という継続をあらわす「ふ」を付加した「霧らふ」じたい、同じ秋で

もあるが、七夕歌の例が、

天漢八十瀬霧らへり男星の時待つ船は今し滂ぐらし

(10・二〇五三)

彦星の船出の光景を詠む「君が舟今滂ぎ来らし天漢霧立ち渡るこの川の瀬に」(10・二〇四五)「天漢霧立ち渡る公は来ぬらし」(10・二〇六八)などの「霧立ち渡る」に通じるほか、「天雲霧らひ雪は零りつつ」(10・一八三二)という雪の降りつづく状態と対比した例がある。「朝霞」にも、また「朝霞止まず軽引く龍田山」(7・一一八一)のように「止まず」がその継続を強調した例がある。「朝霞」のこの秋の田の稲穂の上にいつまでもたなびき続けて晴れない状態をあらわす上句が、下句に対して比喩的にかかることは構造上明らかである。下句の「いつへの方に我恋ひ止まむ」は、だから、わだかまってどこに消えていくのかその方向(出口)の見出せない恋を嘆くものであろう。待ち続けることに必然的に付随するだけに、この恋の嘆きには終りが無い。また一方、待ち続ける決意と表裏するものだけに、深く静かな諦念といった性格がそれには色濃い。

十三、磐姫皇后歌群の特質

八五歌に「君が行き日長くなりぬ」という遠行によつて不在の長く続く夫を待ちこがれることが、すなわちその恋

の嘆きの実質にほかならない。この磐姫皇后の嘆きは、遠行離居の夫を待ちこがれる妻、『玉台新詠』がそれをめぐる様々な詩を収載するが、そのいわゆる思婦(女)の情に通じる。万葉集の歌のなかでは、笠金村の「神亀元年甲子冬十月幸紀伊国之時、為贈從駕人、所詠娘子作歌」と題する歌に、『玉台新詠』のこの思婦関連の「怨情表現との類想句」を村山出氏がすでに指摘(「笠金村の從駕相聞歌」『日本文学』二十九巻、四頁、昭和五十五年七月)してもいる。しかしこの思婦の情は、多く閨怨の色あいが濃い。翻つて磐姫皇后歌のばあい、遠行離居の夫に対して、八五、八六歌にその色調はあつても、八七、八八歌では、現状を受け入れ、老いを迎えるまで、つまりは終生待ち続けるなかでも、恋慕は息まないというのだから、内容の上では、『詩経』唐風「葛生」の詩にむしろ重なるであろう。その詩は五章から成り、遠行離居の夫に寄り添えない苦しみを、第一章の「予美亡此、誰与独処」(わが良人は此に居ない。ただ独りで居るばかり)から「予美亡此、誰与独息」(第二章、独りで安息するばかり)「予美亡此、誰与独旦」(第三章、独りで夜を明かすばかり)と述べて、

夏之日	冬之夜	百歳之後	帰于其居
冬之夜	夏之日	百歳之後	帰于其室

鄭箋に「思者於^二晝夜之長時^一尤甚。故極^レ之以^レ情」と説くように夏の日中、冬の夜間に夫への思いはもつとも激しくなるが、それでも最後には偕老同穴の素志を遂げたいと結ぶ。鄭箋は、「婦人專^一」の「居」を「墳墓」と釈し、この一句について「婦人專^一、義之至、情之尽」と注を付す。ただに空閨を怨む思婦像とは異なり、夫の不在をめぐる怨それ自体より、むしろ怨情をもちながらも妻として夫を一途におもう姿勢を生涯貫き通す理想の婦人像に焦点を当てたこの「葛生」の詩に通じる点こそ、磐姫皇后歌群を相聞の冒頭に据えた最大の理由だったに違いない。もつとも、あくまでも相聞歌として、偕老同穴などという儒教調にかえて、終生待ち続けることに必然的に伴う、その意味では決して満たされないままの、息むことのない恋をもつて結ぶ。それはまた、題詞に「磐姫皇后思^二天皇御作歌^一」という、二首一組のセットを二つ組み合わせた四首構成の歌群の最後を締め括る誠に相応しい内容でもあったはずである。

また一方、相聞の冒頭歌としても、万葉集の劈頭に位置する雑歌冒頭歌とは内容上たがいに対応するものだったに違いない。雄略天皇が丘に菜を摘んでゐる処女に「家聴かな名告らさね」と呼びかけるその歌を、天皇の求婚に狭く限定して捉えるならば、恐らく当を得ない。大和を支配す

る大王という以上に、天下の為政者たる天皇がもつぱら行う巡幸、巡狩にこそ実質がある。その内実や磐姫皇后歌との照応、さらにはそうした歌を雑歌や相聞などの冒頭に位置づける万葉集のそもそもその歌集としての本質についても、究明に向けた取組は今後に委ねるほかない。小稿は、その布石の意味をあわせもつ。

注

(1) この「迎婦」は、中国の七夕伝承にそのまま則するというより、いわば日本的ともいふべき妻問い型を中国的に改変したかたちだから、大奴を娶るため渭水のほとりまで出迎えに行つた文王の親迎をつたえる『毛詩』(大雅・大明)の「文定」厥祥、親迎于渭」に通じる。なお、この「迎婦」の直前の第一句「牽牛之」を『萬葉集釋注四』は「牽牛の」と訓み(87頁)、さらに大伴家持の「十年七月七日夜、独仰天漢、聊述懷」と題する七夕歌の冒頭「たなばたし船乗りすらし」がこの「迎婦船」を詠んだ一二七歌を引き継いでいるとする説を挙げる。もちろん、「迎」に「船乗り」が対応する。

(2) 拙稿「軽太子の禁断の恋の物語」歌はいかに所伝の展開をになったか」(『京都語文』第11号。平成十六年十一月)

(3) 寺川真知夫氏「磐姫皇后の相聞歌」(『万葉の歌人と作品』第一巻 初期万葉の歌人たち。一九九九年五月。和泉書院)に「ただし、允恭記の歌の表現としては『迎へ』よりは但馬皇女の歌のごとき『追い及かむ』(2・115)といった表現のほうが物語の情況設定に即している。」(81頁)と説く。

(4) (a) の類歌に、同じように鵜飼の漁法を詠んだ長歌
(13・三三三〇) がある。

(5) 「安貴王歌」と題する長歌と反歌(4・五三四、五)も
「遠嬌」を詠むが、その左注には「右、安貴王娶_レ因幡八上
采女。係念極甚、愛情尤盛。於時、勅断_二不敬之罪、退却
本郷_一焉。于是 王意悼怛、聊作_二此歌_一也」と伝える。

(6) 稲岡耕二氏「磐姫皇后歌群の新しき」(東京大学教養学部
人文科学科「人文科学科紀要」第六〇輯。国文学・漢文学。
一九七五年三月)に、「迎へか行かむ待ちにか待たむ」と逡
巡し遲疑する下句の表現」(34頁)とあり、最近では廣川晶
輝氏「書紀テキストとしての磐姫皇后歌群」(上代文学会研
究叢書「初期万葉論」平成十九年五月。笠間書院)が「八五
歌で〈造型〉された〈思慮・逡巡する女性〉という〈像〉」
(113頁)を論じている。

(7) 坂本信幸氏「標結へ我が背」(奈良女子大学国語国文学研
究室「叙説」第二九号。平成十三年十二月)に「ずは」と
いう語法をもつ歌」(29頁)の各用例について詳細な検討が
なされている。磐姫皇后歌を該当する例の「典型」とする指
摘(32頁)もあり、表現や表現形式等の違いに焦点を当て歌
の分析に力点を置くが、小路氏や大野氏が分類する例も一括
して扱う。

一方、土橋寛氏「四『磐姫皇后の歌』の再検討」(土橋寛
論文集上「萬葉集の文学と歴史」昭和六十二年六月。塙書
房)は「(X)ずは、(Y)まし」の(Y)の内容により五通
りに分類し、当該歌について「山中行路死への願望」(154頁)
を表す点を独自とする。そして「山尋ね」の旅の痛苦の極
限状況としての山中行路死を歌った」当該歌を含む歌群の前

三首は「被虐的心情の表現及び極限状況の表現」を、また第
四首は「用例万能主義の注釈家の手には負えない独自な心情
表現」をそれぞれ「特異」とする(168頁)。「被虐的心情表
現」説には、(注3) 寺川氏論考に批判がある。

(8) 関には兵士を配置して守固すべきことを「凡置_二関_一、守固
者、並置_二配兵士_一、分番上下」(軍防令第一七・54)と定め、
この関の通過には「過所」(関所手形)を必要とし、その記
載に違う関は「関司不得_二隨便聽_一其出入」(関市令第二
七・3)というように通行ができない等、厳重な管理下にあ
った。

(9) 類例に古事記の雄略天皇条が袁杼比売の献歌としてつたえ
る「やすみしし我が大君の朝とはいはい寄りだたし夕とはいはい
寄りだたす脇机が下の板にもがあせを」がある。

(10) もちろん、別の解釈もある。堀川信行氏「イハノヒメ伝承
の多様性」『万葉集』巻二・磐姫歌群から」(菅野雅雄博
士古稀記念「古事記・日本書紀論究」平成十四年三月。おう
ふう)は、「必ずしも指示する語が具体的に示されている例
ばかりではない。(中略)すなわち、本来はこんなにも、と
いったニュアンスで、単に恋の思いの強いことを強調する表
現であったと考えることができる。」として、その注には同
様の見解に立つ注釈書を示した上で、当該磐姫皇后歌につい
て次のように指摘する。

むしろ、「かくばかり」とうたわれる歌の通常の例のよ
うに、本来は単なる強調表現だった可能性が高い。それ
が《四首》の一首とされるにあたって、「前歌の下三句
をさす」(伊藤博「萬葉集釋注」)の説「榎本注」役割
を与えられたのではないかと考えられる。(246頁)

(11) 注(6)稲岡氏論考。注(3)寺川氏論考も、従来の説を退けて稲岡説を支持する。(183頁)

(12) この解釈を引き継ぐのが主流であり、注(10)梶川氏論考も伊藤博「萬葉集釋注」の「いつまでもこんな風にして、の意」という注を引き、「①と②(八五、八六歌―榎本注)を承けてこそ成り立つ表現であろう。」(28頁)と説く。ちなみに、「ありつつ」は全て「ありつつ見れば(見れど)」のかたちをとる。なお、渡部和雄氏「ありつつも我は到らむ」(『檀山国文学』第二五号。平成十三年三月)が「ありつつも」の各用例について逐一論じている。磐姫皇后歌にも言及しているが、「いつまでもこんなふうにして」(日本古典文学全集の当該歌の頭注)で「よいことになる」というより、この万葉集の最初の「ありつつも」がこうして規定されてきたわけである。(6頁)と述べるにすぎない。

(13) 注(12)所引の渡部氏論考がこの歌の一部をそのまま論題に使い正面きつて分析を加えたなかにいくつか先行説を挙げている。分析の結果、「『ありつつも』にはへこうして絶えず」という内容があったことになる。という。

(14) 注(12)所引の渡部氏論考(8頁)。「萬葉集釋注七」の当該歌の語釈にも「波が絶え間なく立つ意」(295頁)とある。

(15) 「登神岳 山部宿称赤人作歌」と題する長歌に「三諸の神名備山に五百枝さし繁に生ひたるつがの樹のいや継ぎ嗣ぎに、玉葛絶ゆることなく、ありつつも止まず通はむ、明日香の旧き京師は(以下略)」(3・三二四)とある例だが、上接する「つがの樹のいや継ぎ嗣ぎに、玉葛絶ゆることなく」と一体的な関係のもとに、下接の「止まず通はむ」とかわるこのありかたは、「旧き京師」に対する、長歌の結び「見るこ

に哭のみし泣かゆ古思へば」という作者の思いと不可分のかわりにある。これらのかかわりを慎重に見極める必要がある。

(16) 佐佐木隆氏が「へ何時辺乃方二我恋将息」―空間的意味か時間的意味か―(『上代語構文論』の第二章。平成十五年九月。武蔵野書院)に「いつへの方に」をめぐって副題に掲げる問いに「結局は『萬葉考』の何れの方と云也」という説明が、意味的な面に関しては最も妥当性が大きいと言える。(64頁)と解を与えている。詳細な考察によつてその解を導きながら、また別に「つまり、空間的な意味の『いつ』と時間的な意味の『いつ』とが類似の音韻を持つことを前提に、『いつ』の部分にへ何時」をあてることによつて時間的な意味をそこに重ね合わせようとした、ということである。(65頁)と説く。この表記に投じた「何時へ」のあらわす意味を、先行する八七歌が導いている。

(17) 遠行離居をめぐって、その理由に、征役と死亡との二説がある。集伝はじめ遠行離居の夫を征役に従うものとするが、その一方、たとえば馬瑞辰「毛詩伝箋通釈」(卷十一「葛生」が「亡」をめぐってこれを鄭箋が「無」とすることに關して「蓋亦棄亡之義、不_レ以_レ亡為_レ死亡」とわざわざ否定するよううに死亡説も根強い。げんに漢詩大系「詩經上」の高田真治氏注釈は、この詩を悼亡詩とする。馬氏は「亡」の考証を通して「是亡即不在之證」と説く。